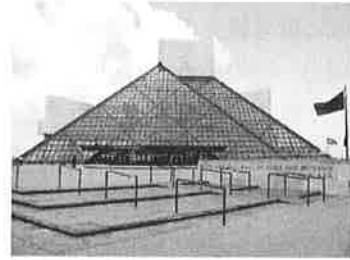


ISO/TC35/SC9国際会議に出席して

調査研究部 井関 匠三

第30回TC35/SC9国際会議が6月9日(月)から12日(木)にかけて米国のクリーブランドで開催された。今年もこの国際会議に参加する機会が与えられたので、この場をお借りして状況の一端をお知らせしたい。会議の詳細な内容は国内委員会などで専門委員から報告されることでもあり、ここでは会議の雰囲気やそれに関連する印象を記載するにとどめたい。



ロック・アンド・ロール博物館（正面）

1. クリーブランドについて

まず、最初に会議の開催された場所のクリーブランドについて少し触れておこう。

クリーブランドは5大湖の1つであるエリー湖とそれに合流するカイオハ川との接点を中心に開けた都市である。名前の由来は、モーズ・クリーブランド（コネチカット出身の独立戦争時の将軍）が1796年に開拓したことから名付けられた。当時は、2700人程度の住民であったが、現在は150万のオハイオ州有数の大都市になっている。

数十年前までは、製鉄、自動車などの工場群が立ち並びアメリカ屈指の工業都市であったが、住環境の悪化（例、カイオハ川の汚染）で住民は都市から郊外に移動、それに伴って商店、レストラン、娯楽施設も移り、1960年代のクリーブランドの繁華街は誰も住みたがらない空ビルの目立つ死の町になったといわれている。1980年代になり、公共広場に高層ビルが建設され、古い倉庫は新しくレストランに改造されるなど、現在はアメリカ一流企業の30社以上の本社がある重要な都市として再生・変身している。

クリーブランドで有名なのはまずは交響楽団であり、さらに現地で始めて知ったことは、ロック・アンド・ロール発祥の地であり、プレスリーから始まる歴代の代表的な歌手の衣装や楽器などが展示され好きな歌手の好きな曲が自由に聴き楽しめるなど非常に良く整備された素晴らしい博物館がある。

また、広大な大学の構内には立派な美術館があり東洋の美術品や中世の甲冑の収蔵で有名である。ダウントウンにはショッピングモールと野球場（インデ

アンスの本拠地）が出来ているが、クリーブランドは観光都市ではなく、（土日は、殆どどの商店は休み）重要なビジネス都市といった印象を受けた。

2. ISO/TC35/SC9国際会議

会議は、ダウントウンのほぼ中心にある21階建てのシェラトン・ホテルで開催された。

場所と日程はASTM D01&G03（塗料関連）の会議にあわせて設定された。

このホテルは古めかしい調度家具類はあるものの、1階にFAX、Internet端末接続およびコピー機などが設置された部屋があり、宿泊客であれば部屋のカードで開錠が可能で、無料で自由に使用が出来、また、各部屋にはInternet端末が来ていて、まさにインテリジェンスビルディングをホテルにしたような構造になっていた。

ホテルの6階と7階が会議室になっており、約50~60名が収用できる大会議室及び約20名入れる小会議室が多数あり、WG会議は個々の小会議で開催された。

日本からの参加者は、以下の8名である。筒井晃一（日本ペイント）、豊田常彦（日本塗料工業会）、田邊弘往（大日本塗料）、田中丈之（エー・アンド・ディ）、舛岡茂（ニチユ関西）、高橋一暢（カナエ塗料）、桐村勝也（日本塗料検査協会）それに私の井関匠三で、今回は、ASTM D01およびISO/TC156メンバーである須賀茂雄氏（スガ試験機）が参加された。

会議の開催期間中、ISOやASTMだけでなく、他の会議も併行して開催されていた。ASTMは8日(月)から11日(木)まで、15分、30分、1時間および2時間刻みで3~5会議

が、ISOは9日(月)から12日(木)まで、午前と午後それぞれ1ないし2会議が同時進行で行われた。

今回のトピックスとして、代表的なもの2、3をあげると

- 1) ここ数年来、ISO/TC35/SC9の中で現行の劣化塗膜(さび、膨れなど)の不鮮明な写真図版を目視および画像処理に適したコンピュータグラフィック(CG)図版に置き換える日本からの提案は注目されている課題の一つである。しかし、国際標準規格化の過程で著作権はすべてISOに移行する可能性が濃厚であったので、今回、今までの成果を集大成した「劣化塗膜の評価基準」(英訳版)を持参しWG26(塗膜性能評価部会)において関係者に紹介し、日塗検が基本的に著作権を持っていることを認めさせた。
- 2) ISO規格の中で塗板にカッターで切り込みを入れてさび試験する方法がかなりあるが、さびの発生の仕方は切り込みの度合いによって大きく左右される。切り込み治具や方法の規定がないため日本が主体になってWG25(塗膜の環境試験部会)で規格化を呼びかけ、今回、各国で協力していただいたRound robin testの結果を報告した。このテーマはISOだけでなくASTMメンバーも関心が高く年内に日本がCD案を作成することになった。
- 3) 船舶防汚塗料で錫系の防汚剤は環境汚染の問題で全面的に禁止の方向にある。世界的にそれに変わる非錫系薬剤が検討されている。日本から非常に特徴のあるPyridine-triphenylborane(PK)を提案し今回、その薬剤の溶出特性についてWG27(防汚剤部会)で発表した。その結果、年内にNWIを作成しWG27委員会で審議してもらうことになる。

3. ISOとASTM

TC35が米国で開催されるのは一昨年のピッツバーグ含め4回目である。

ISO会議がスタートするに先立って9日(月)午前8時からISO/TC35/ASTM D01の合同会議が開催された。出席者は約50名でISOメンバーは各国の代表者約10名が参加した。

ASTM D01議長の下で各自の自己紹介に続いて、議長からASTM D01とISO/TC35のHarmonizationにかかわる基本的な考え方や方針説明があり、続いてISO/TC35議長が現在不在のため、ISO/TC35/SC9議長の下でMr. Chambersが挨拶された。

2001年6月に、当時のTC35委員長のProf. BanckenとASTM D01委員長のMr. Praschanが“the Memorandum of Understanding (略してMoU)”に互いにサインした合意協定文章がある。その趣旨は、「新しい規格作成に当たって両者のいずれかに既に規格がある場合には、もう一方はその規格の作成は行わない。旧規格は見直しの時点でどちらかに統合し世界単一規格を目指す。」というものである。

ここで、ごく簡単にASTMとISOの歴史を振り返ってみると、ASTMはコンセンサスに基づいた自主的な規格を開発・作成する目的で、1898年に設立された民間組織の非営利法人である。長い歴史の中で多くのメンバーのコンセンサスを得た規格は理論的かつ実用的に今や物流の交流に不可欠な世界的規格になっているものが多く、今でも世界の統一規格として各国に働きかける努力が続いている。現在、100カ国以上の関係者がメンバーになっており、収益の約75%は出版物の販売でまかなわれている。

一方、ISOは、第2次世界大戦後の1946年に“工業規格の国際的統一を促進する”ことを目的に設立された。近年、欧州各国の単一市場への統合とWTOの発足による世界貿易の考え方が変わり、関税障壁撤廃、と同時に技術障壁の撤廃も重要事項となり、WTO/TBT協定では地域内規格も国家規格もISO規格との整合性が問われることになった。現在、世界の100カ国以上が加盟していて、スイスに中央事務局があり、規格作成業務に必要な資金の約65%は主要国の分担金でまかなわれており、出版物収益は30%弱に過ぎない。

WTOがISO規格を市場に導入するようになったことから、米国は今までの実績と技術優位によりえられた世界市場シェアが侵されることを心配するようになり、ISOへの関心を深めている。しかし、現実の問題としてASTMにとっては出版物の著作権がなくなることは死活問題となっている。

会議では、ASTM事務局から具体的な進展状況報告と問題点についての質疑応答があった。漸次、進展が図られつつあるが、上述したように設立時の基本方針の違いや利害関係が絡み合って必ずしも順調に進んでいるとは思えなかった。

4. Q-panel招待のバーベキューパーティ

QUVなどで世界的に有名なQ-panel本社がCleveland郊外にあり、ISO&ASTMの主たるメンバーがQ-panelよりバーベキューパーティへの招待を受けた。

会議の第2日目の夕刻にクラシカルな貸切観光バス2台がホテルに横付けになり、カジュアルな服装に着替えてそれぞれが乗り込んだ。ホテルから約40分車で揺られた閑静な郊外にQ-panelの本社があった。



参加者は夫婦同伴者含めて約50～60名であった。地ビールやワインを飲みながら適当につまみを食べ自由な歓談で始まった。その内、Q-panel社長のMr. D. M. Grossmanの挨拶があり、その最中に小雨が降り始めた。当日の天候は曇りで時々雨混じりであったため、当初は野外の芝生の上でパーティーが計画されていたが残念ながら、屋内ないしは一部テントを張った屋外で開く事になった。テント内に大きなバーベキュー用の鉄板が持ち込まれ、専門の業者が注文に応じて牛肉、サーモン、海老などを焼き、夫々がそれを食べながら歓談した。テーブルには必ずQ-panelの社員が1人は付く、気の配りようであった。途中で、新製品の紹介や試運転デモがあった。

約2～3時間の楽しい時間を過ごし、同じ貸切観光バスでホテルに帰着した。WG27の舛岡氏は余程話が弾んだのか時の経つのも忘れ別に帰ることになった。

5. 世界単一規格の潮流の中での日本の役割

ASTM D01とISO/TC35との間で交わされたMoUを実施するに際してのGuidelinesが2003年5月に発行された。要するにISOとASTMの類似したDouble Standardはなくし、試験規格は1つに統合するための指針である。一方、昨年及び今回の国際会議でProf. Bancken (TC35議長) および Mr. Chambers (TC35/SC9議長) の相次いだ辞任表明でトップ人事交代という大きな過渡期にあるためか、相対的には今回のISO会議は低調であった。

このような中で日本は十数年間の諸先輩の地道なISO活動の成果により単なる投票案件の審議処理活動段階から積極的活動段階 (NWI提案、JISに見合ったISO修正など) に入り、ISO/TC35またはISO/TC35/SC9での存在が着実に定着しつつある。

しかし、ISO/TC35/SC9においてはドイツとイギリスが重要なWGのConvenorとなっており、残念ながら日本の意見が必ずしもスムーズに通らないのも現状である。

以上の状況を踏まえ、欧米の2大規格の中で今後のわが国の役割を再検討する時期にあると思われる。以下に、2, 3の私見を述べて終わりたい。

- 1) この際、初心に帰って「何のためにISO活動をするのか」「それが業界、ひいては日本のためにどのように役立っているのか」「現状のISOの中でのNeedとSeedは何かを、追求する。(CG図版の提供は成功した部類に入るのでは?)」その中で国際標準化戦略と戦術はいかにあるべきか」など有志で再考・討論し、今後の活動に反映させる。
- 2) 欧米のKeymanとの協力・友好関係の持続: 日本の意見が通るかは、WGのConvenorやSecretaryなどとの良好な協力関係が重要であり、人的な繋がりを含め継続的な関係保持に留意する。
- 3) ISOのNWIの採用は1国1票で左右される。2)と同時にアジアでの仲間作りを辛抱強く進める。特に、将来の経済大国の中国との協力関係は重要と考える。

2. IT化への対応

- 1) 今回の総括会議資料はpaperlessになり、hard copy serviceは一切なくなった。今までのSC9およびTC35総括会議は、各WG主査が作成した議事録のhard copyで説明を受けて、その要約を議事録に残すごく丁寧な形をとっていた。しかし、今回は、WG主査が口頭で総括報告を行い、SC9事務局が画面に出しながらpower pointで議事録を作成し、出席国の代表者に賛否を問い即決してまとめるという効率のよい進行方式がとられた。今後の会議で意見を通していくには、出席者は語学力と技術的判断力、それに一層の周到的な事前準備が必要と思われる。
- 2) ISO/ASTMの塗膜の評価試験は目視による官能評価からコンピュータによる画像処理評価に着実に移行しつつある。日本提案のCG図版はこの基盤作りに貢献しているが、これを使用したソフト開発は欧米の先進国に比べて大幅に立ち遅れている。早急に、今から対策を検討する必要がある。

以上